

大型スクリーンに「逃げる」

神戸は東京の霞が関から電話一本でつかまるような状態ではなかった。神戸市役所三号館二階の市消防局管制室。一一九番を受ける百十八回線の緑ランプが点灯、電話音が鳴り響く。「子供が壊れた家

の中や」「あかん、早う来て」「火事や。水が出えへん」。一月十七日午前六時五十分、司令課長藤原義正（壱）の周りは、悲鳴と絶望の入電ばかり。

神戸市内十一消防署の当直二百九十二

人、百台の消防車のうち八十台がすでに出払った。だが、それが限界だった。応援要請には「個別に「対応せよ」と答えるのみ。これしか出来ないのか。藤原は目の前の七十インチの大型スクリーンをにらんだ。

ろ。藤原はスクリーンに向かってどなった。三宮ではフラワールードでビルが傾き、百貨店がつぶれていた。レンズをまわす。どこも同じだ。黙示録のような街があった。藤原の三十年を超す経験とノウハウが役に立たない。歯ぎしりした。一一九番通報は六千九百二十二件。応答がない無音電話は二千七百六十五件。

兵庫県警の暫定警備本部は、当直警官らによって午前六時四十分、生田署に設置された。だが、届いたのは「阪急伊丹駅倒壊」「死者三人」など断片的な情報。これがその時点で把握していた被害のすべてだった。官舎から駆け込んできた県警本部長滝藤浩二（五）は大災害になると判断、直ちに警察庁に応援を要請した。一万五千五百十人の県警職員のうち、当直は五十二署に約二千人、阪神地域ではパトカー六十台が警ら中だ。何人が動いているだろう。警備部長はまだか――。

伊丹署では六時過ぎ、「阪急伊丹駅が壊れた」と住民が駆け込んだ。駅前交番への電話はつながらない。現場に到着したパトカー無線から叫び声が聞こえた。「駅も交番もつぶれた」

西宮署刑事一課係長の高見正典（四）は尼崎市東難波の自宅で、長女裕子（三）、二女尚子（九）に「行かなあかん」。昨年三月、病気で亡くなった妻節子（当時四十三歳）の倒れた仏壇を起こして祈った。「娘を頼む」

港島庁舎は液化化で使えない。かわりに生田庁舎での本部設置準備が始まる。石野はとりあえず暫定本部のある生田署に着いた。



須磨ノ浦女子高西館

1965年に完成。地下1階、地上5階。普通教室、食堂など28室と最上階が講堂（神戸市須磨区、1月25日撮影）

ポートアイランドの高さ百十七メートルのワールド本社ビル屋上の監視カメラから、半径十キロ・メートル以内の惨状が映し出されている。長田区で真っ黒な煙が幾筋も立ちのぼる。四十五倍ズームに変える。小さな黒点は逃げ惑う人間の姿だろう。家屋が火にのまれる。「逃げ

た。本来、災害時の中枢機能を果たすべき

警備部長の石野重明（五）は神戸市西区の自宅からポートアイランドの県警港島庁舎に車で向かう途中、立ち往生していた。JR新神戸駅前の家屋、ビルは傾き、神戸大橋も通行止め。メリケンパークの水上署に車を置き、警備艇で上陸した。